



日程：二〇〇二年十月七〜九日

共催：レセ・レリール協会(フランスの読書推進団体)&紙芝居文化の会

講座会場：バニユー市(パリ近郊)「ルイ・アラゴン」マルチメディア図書館

講師メンバー：酒井京子、日下部茂子、川端英子、加藤武郎、千竈八重子、

田中和子、松井エイコ、野坂悦子(順不同、運営委員の中から計8名)

講座内容：総論「紙芝居の形式・特性・歴史・歴史、演じること」

実践「紙芝居が演じられている場」

創作「創ることについて」(ワークショップ形式)

「紙芝居文化の会」運営委員八名がそれぞれ講師を務め、フランス人の参加者は、のべ二〇〇名以上でした。各地から司書、イラストレーター、美大生、語り手などが集まり、熱気あふれる講座となりました。フランスの大勢の人たちに、紙芝居の持つ可能性を感じてもらったことができたと思います。そして、未来を担う子どもたちに、平和の大切さや、愛や友情を伝えていきたいという思いは、国境を越えてひとつだということがわかりました。そのことがまた、講座の成功を支えたのです。

心を通い合わせたフランス側の人たちと、最後は涙、涙でお別れました。三日間の講座は、共感 (le partage des sentiments) の世界そのものだったといえるでしょう。

共催団体「レセ・レリール協会」代表

ジュヌヴィエーヴ・パットさんから届いた手紙(抜粋)

なにより大切なのは、あなた方がとても短い滞在期間に、あれほど惜しみなく伝えてくださったことがすべて、非常に大きな成功を収めたということです。深く心を動かされたと言いが言い、私自身も、マリー・シャロット(註：「ルイ・アラゴン」図書館館長)も、言葉にできないほど今回の出会いに感動しています。

特別な人たちとの出会い、本当に広い心を持った本物のアーティストとの出会い。平和を尊ぶ文化との出会い。皆さんのおかげで、私たちはいつそう平和を愛するのです。私たちは、様々な方法で紙芝居と関わり続けていくつもりです。紙芝居の試作を、来年のポローニャ国際児童図書展で見てもらいたいと願っている参加者もいるでしょう。親しい友人が、これからフランスで紹介していく紙芝居の選択と仏訳を手伝ってくれるはずです。また、こちらで舞台の図面を用意し、他の図書館でも同じ物が作れるようにするつもりです。ある編集者は、何点か日本の紙芝居を翻訳出版できるかどうか検討中ですし、マリー・シャロットは日本から紙芝居の輸入も考えています。フランスでは、すべてが紙芝居にむかって動いているのです。私たちも、あなたがたといっしょに、なにより紙芝居を楽しみたいのです。

私たちの平和への思いや行動がたとえ小さくても、小さな炎のようなもの、美しく優しい小さな光のようなものであれば……、その光は私たちに、世の中には、違う声もあることを思い起こさせます。だからこそ、あなた方に対して、そしてあなた方がもたらしたものに対して、心からお礼を申し上げたいと思います。

心より愛をこめて

ジュヌヴィエーヴ